

宝 籤(たからくじ)

好枝

智子は掃除の手を止めて腰をかがめた。

整理タンスと壁の隙間に、小さな紙切れが落ちているのが目に止まったからだ。拾い上げて見ると、きれいな印刷のマンガのキャラクターがついた宝くじだった。

「どうしてこんなところに……」

と口から出かかって瞬時にそれは判明した。

智子の夫英治は、宝くじを買うのが趣味なのである。買ってくるとそのくじを整理筆筒の上の、以前海外旅行に出かけた時見つけ、買って来たという仏像の前に置き、抽選の日まで拝むのだった。

その仏像は珍しい形をしていた。

小さいが顔が三つ付いている。高さ十五センチほどで左右の顔は女性らしく穏やかで上品だが、問題は正面の顔である。小振りな輪郭なのに、大きな目と唇を少し引き上げ気味に曲げて、威嚇しているように見える。そして両脇から物を受け取るように、両手は前に突き出している。およそ仏像らしからぬ手の格好だ。英治によると

「この手の感じがいいのだ」ということらしい。

だが、しかし当らないことのほうが多く、

「ちくしょう、まただめか。この手はちっとも金をすくい取りやしない」と言い、仏像の頭を手で叩き、くじの殆どはゴミ箱行きになるのが常だった。

「いつもお願いしているのに何のご利益もないのね」

智子は何度か皮肉を込めて言ったことがある。

それに対して、英治が言うことは、

「お前も協力しないからだ」

「そうかしら、神通力があるように見えないわ」

「仏像だし、花や水を供えるのが当たり前だろう」

智子は軽く受け流しながら、心の中で（こんな仏像ゴメンだわ）と、白けていた。

以前、ここには智子の両親の写真を置いていたのだが、

仏像の奇怪さに、別の所に移してしまった。

今拾った宝くじもゴミ箱行きの1枚が、どういう加減かすべり落ち、隙間から1センチほど覗いていたのである。

「どうせ当たりっこないわよ」

手の中で丸めようとして、フトそのままセーターの張りポケットにしまいこんだのである。

久保智子は五十歳。

中央線の荻窪に住んでいる。

五年ほど前から、自宅のある駅から二つ先の町のスーパーで、パートタイマーで経理の仕事をしている。近くにも働く所はあったが、近所との間を置きたかったのである。

思いがけない三日間の休日で、とりあえず見えるところだけ片づけていた。「自分の家」をふりかざすわりに、英治は殆ど家のことには手を出さない。

「たまには掃除くらいしたら」

時折言ってみるが、腹の立つような返事しかかえってこない。言いながら智子もいい加減なのである。

なにしろ、この家は英治の父親宗介の持ち物であり、その代人のような顔をしているにすぎない夫なのだ。

休みの一日は遠出と決め楽しみに体を動かしていた。

何をするのもどこへ行くのも智子は一人だし、そばに夫の姿はない。一人の気楽さを智子は好み、寂しいとも感じなくなっていた。当たり前感覚になって久しい。

「混む電車や、人ごみをかき分けて観光地に行って、疲れるだけだ。家でテレビでも見る方がよっぽどいいね」

それは表面上の理由で、実際はお金の掛かるようなところには近づきたくないのが本音なのである。

英治は勤め先の旅行などは最小限付き合うが、翌日は午前中に帰って来る。旅を楽しむ、などという気持ちはない。

感心するくらい金銭に関しては、徹底していた。

「私の好きにさせていただきます。」

「どこへ行ってもかまわないが、自分の金でやってくれ」

「そんなこと言われなくても分かっています」

かえってそのほうが気楽というもので、英治のいる休日など智子はつとめて外出するようにしていた。

息子が一人いて数年前結婚し、東京近郊の私鉄沿線に住んでいる。相手が旧家の一人娘なので、なかば相手側にとられたような形になっているのである。

息子の貴彦は智子に似て、顔立ちがよく今風にいう「イケメン」の部類である。有名私立大学を出て、商社勤務となって間もなく、知り合った嫁美穂は、これも今風でいうところの「バツイチ」経験者であった。

貴彦が、父親の久保英治と母親である久保智子に美穂のことを打ち明けた時、美穂の「バツイチ」のことは口にしなかった。後になってから智子にだけ打ち明けたのである。

「そんなこと何故今頃言うのよ」

「だって別にたいした事じゃないだろ。子供がいるわけでもないし」

「そんなら今更言う必要ないじゃない。何のために聞かされたのか理解できないわよ」

「一応おふくろの耳にだけ入れとくよ」

そんな勿体つけた言い方に腹が立ち、なおも智子は貴彦をなじった。挙げ句、言うのには、貴彦にもはっきりしたことは分からないらしいが、家つき娘のわがままが一番の原因だったので

ないか、というのだった。そんなだったから相手が女性問題を起こしたのだという。

「じゃ、貴彦あなただってその二の舞になるかも知れないわよ」

「俺は大丈夫さ」

どう大丈夫なのか智子は聞かなかった。しかしこの子は英治の子だ。女に関してなら智子は保証できると思った。夫の英治はその方面には真面目だったからである。真面目、というより、女遊びにお金など使いたくもない質なのである。男だから浮気心がないはずはない。だが、女を考える前に金銭の計算を先にするほうだ。

貴彦も多分にその点は父親譲りのにおいをもっている。

実際、美穂はまだ若くきれいだった。短大を卒業してすぐに結婚したらしいので、無理があったのかも知れない。そのせいか、貴彦との間にまだ子供はいない。

美穂は結婚前、一度智子の家に両親と挨拶に訪れたきりで、その後殆ど付き合いはない。それでも貴彦だけが時折、思い出したようにやって来るのは、息子という立場もさりながら、父親の英治の多少持っている、財産への挨拶なのである。しかしどんな形にしても来るのは息子だけで、人の出入りのない家になってしまった。

その原因が夫の英治にあることは、よく分かっていた。

「無理に付き合う必要はない」英治の持論である。

今までは他人とのことだからそれまで、と割り切れた。しかし息子夫婦は身内であり智子は辛かった。

「美穂がお母さんのことは好きだって言ってたよ」

貴彦はそれでも嬉しそうに母に報告したりした。瞬間的な本能で人間は、自分に合うか疎外するべきか、それを嗅ぎ分けられるのである。

英治は並外れた吝嗇家で、そのせいか人に好感を持たれない性格である。経理に堪能な智子だから、やり繰りはお手の物でやってこられたようなものなのである。

経理は短大の時、友達に誘われて面白くなり、それでも必死に勉強して2級の資格までは取っていた。

「どうして一級まで取らなかったんだよ。取れなかったんだろ。ま、そこいらへんだろうな」

いつも英治はそう言って智子を下品に揶揄した。その智子の収入が、今では英治と家計費は半々になっているのである。補わせていることを知らない筈はないのに何も言わない。智子も摩擦を避けているから静かなのだ。そこら辺で何とか保っている夫婦なのだとしみじみ思う。だから智子の働きは、その点で平穩なのであった。

英治は公務員である。

公務員は結果がすべてであり、英治も階級試験などはすべてクリヤし、仕事の面では優秀であった。しかしお金を惜しむ性格が災いして、人との付き合いは余りいい方ではない。だが人間性がどうあれ仕事を全うしていれば問題はなく、まさに英治向きの仕事環境であった。

「親父が家を建ててくれるそうだ」

英治がそう言ったのは十年ほど前だった。

英治の父親宗介は、中央線の相模湖の近くで親から受け継いだ土地で、英治の兄と農業をやっている。

「土地をかなり処分したらしい。税金も大変らしいからな」

と、言う話しは、英治が父親宗介と電話でやり取りした挙げ句、一人で呟くように言っていたのを、洩れ聞いていた。

そのお金が、税金を納めた後どれくらい残ったのかは知らないが、息子に家を建て与えることになったらしい。

「親父が用事で東京に出てきた時、泊まれるように少し大きな家になるらしい」

「私の意見も聞かないで、勝手に決めないで下さい」

「親父が建てる家だぞ。何でお前の意見など訊く必要があるんだよ」

「私はこの家の主婦なのよ。あなたの妻よ。当然でしょ。お義父さんもお義父さんよ。私に相談してしかるべきでしょ。この際言いますけど、何故いつもお義父さんなの。訳を聞きたいわ」

智子はいっきにまくし立てた。

次の瞬間、英治は智子を殴っていた。

「親父の悪口を言うな、親父に逆らうな」

気性の激しい英治は激してくると、相手構わず「手前」呼ばわりしながら、突っかかってくるのだった。

「私が聞きたいのは、父親の顔色ばかり気にしているあなたの態度が解せないのよ」

「親父は俺を東京に出して、大学も出してくれたんだ。恩を感じて何が悪いんだよ」

そしまたひとしきり常軌を逸した言動を並べた。

「恩」を感じるの悪いことではない。子供として感謝するのは当然である。しかし、英治の場合異常なのである。

そんな激しさの矛先は、うちにあっては容赦なしに智子に向けた。とにかくお金と父親に関して深入りさえしなければ、波風は立たない、というおかしい家庭なのである。

今までも一人になることを考えたことはあるが、どうゆうわけか貴彦が

「そんなことだめだよ」と、いつも止めた。

勘繰れば自分に負担が掛かるのを警戒したのかも知れない。そんな計算をするところは英治似なのである。だが今は智子も自信はあるし貴彦は立派に独立した。憂いはないのだ。最後のチャンスかもしれない。

その日智子は朝早く家を出た。久し振りに両親の墓参りと、その近くのお寺にある墓に詣でる

つもりであった。

それは幼馴染みの、好きだった人の墓碑である。

智子の住んでいた町の隣町に住み、一つ年上の同窓生でお互いの両親も認めていた。おなじ旅館業だが彼の家は中堅のホテル業を営んでいた。

将来は長男の彼と智子に経営を任せたい。と切望されたことさえあった仲であった。

それが……、

希望した大学に合格し、入学までの春休みの一日、喜び勇んで友達と行ったオートバイのツーリングで事故を起こし、即死してしまった。

智子が短大一年生になった春のことである。

二つのお墓の前で、それぞれ還らぬ日々を思いおこし

「あなた達のことは忘れないわ」

もう来ることのないことも告げ立ち去った。

近郊の繁華街を彷徨し、気持ちを落ち着かせて帰宅した。

英治はどこに行ったのか留守だった。

智子は今日一日の潤いと幸せを噛みしめていた。

三月にはいった或る日曜日、庭に植えた近頃はやりの洋花も咲き始め、先日汗を流した成果を、リビングからも見えて目を楽しませた。しかし英治は新聞とテレビだけに目を向け、庭に花がいつせいに咲きはじめたことなどには関心はもたなかった。気が付いていてもわざと何も言わないのも、智子にはよくわかっていた。だから智子は自分だけで楽しんでいた。

だがその時英治はこう言ったのである。

「定年になったら田舎の兄貴に畑を少しかりて、農園をやってみようかと思ってるんだ。その練習としてそれまでこの庭で、とりあえず大根とか、小松菜あたりからはじめようと思う、夏休みにでも耕し直すからな」

智子は頭に血がのぼるのを我慢して言った。

「あなた、いま咲き始めたこの花は夏過ぎまで咲くんですよ。私がせっかくここまで丹精こめたのにひどいわ」

思わず大きな声を出していた。

「花なんか何の役にも立ちやしない。野菜などを作ればお前だってスーパーから重い荷物かかえて来る事も、野菜分減るじゃないか。定年になったら家計を締める意味でも大いに意義があるんだよ」

「今まで、私が肥料を入れたりして土を可愛がってきたから花だってよく咲くようになったのよ」

実際、家を建ててしばらくは、洗濯物をのびのびと干すだけの、踏み固めてしまった庭だった。それまで公務員宿舎のマンションにいたから、ベランダの鉢植えくらいの感覚しかなかった。ある時、智子が訪ねて行った友人の家の庭の素晴らしさを見てから、猫の額よりいくぶん広い我が家の庭も、ガーデニングしてみたくなり五年をついやしていた。智子がパートに出るのとほぼ同時期からの、片手間の手入れでもありその花作りが智子にとって、思いがけず穏やかなひとと

きを与えていた。

「だからさ、その土が野菜作りにすぐ役にたつから好都合ってわけだよ。最も野菜にはもっと違う肥料が必要かもしれないけどな」

「だったら花と野菜と半分ずつにしてよ」

智子にも意地がある。ここはどうしても譲りたくなかった。

「それはだめだよ。野菜は場所を取るから」

「きれいな花を眺めるのは気持ちのいいことじゃない」

「俺は前からこんな花が何の役に立つのかと思ってたよ。花なんかより食べ物だよ。そうだ、鶏も飼ってみるかな。離し飼いでそれこそ新鮮な卵が食えるぞ」

「鶏なんて止めて下さい。騒がしく鳴くし、糞をあちこちして不衛生だわ。近所から苦情がきます」

「家は角地だからうまく小屋を作るさ」

「私は反対ですからね。せっかくここまで花壇として、整備したんですから」

「ガーデニングとかなら玄関のあたりでやればいいだろ、どこを使おうと、俺には権利があるんだからな」

またいつもの口癖が出て話は終わった。

智子はもう口をきくのも気だるくなっていた。英治は絶対に自分の主張は曲げないからだった。菜園など作ったら煩わしいことが多くなり、どんな事になるか分からない。そんなことは絶対に避けたかった。

英治は車を持っているからそうなれば、何かと畑仕事に使う器具などを買い集めるだろう。そんなことには惜しみなくお金を使うのである。智子は今では英治の車に殆ど乗ったことはない。車で遠出したのは、息子が小さい頃、夏休みの宿題作りで数回出掛けたきりで、後は英治がそこら辺を乗っているだけだった。

家が建ってあれから十年がたっていた。

だがその間英治の態度の大きさをいや、というほど知らされてきた。

「親父のお蔭だからな。お前の方からは何も手伝ってもらってないんだから」

英治自身そう言いながら、まだ家の権利書を受け取れない焦燥感を感じているはずなのだ。父親宗介に言えないiraだちを智子に向けているのだろう。

英治の父親宗介のための家なのか、息子の家なのか気持ちも計りかね、智子にしてもこの家に何となく愛情すら持てないでいた。友人の真似をし、花などを植え、少しでも家になじもうと思ひ努力もしてみたが、父子の態度を考えれば早計だったし、虚しさだけが心に広がった。

智子の実家は、東京の下町の門前町で代々小さな旅館を営んでいた。近くには大少のお寺がたくさんあり、地方から出て来る人が多いため結構繁盛していた。智子が短大卒業近くの時、父親が倒れ他界してしまった。サラリーマンだった兄が会社を辞め、恋人だった兄嫁になる人と結婚し、急遽旅館を継いだのだった。

英治と智子は、二・三回行っただけの或る登山の会の、パーティー同士の交流会で知り合ったのである。当時英治は大学を卒業して働きはじめたばかり、智子も卒業したら、しばらくは父母

と共に家業を手伝うつもりだった。父親はそれを喜んでいた。

しかし、事情は一変した。父親が居なくなり次第に兄夫婦に実権が移りはじめてきた。母の力も弱くなり智子も居づらくなり、英治との結婚という形で家を出てしまったのである。

父親が用意しておいてくれたわずかのお金を母親が渡してくれながら、ソッと言った。

「このお金は英治さんに見せないで、あなたの名義で貯金しておきなさい」

母は商人だし人を見る目は肥えていたのだろう。英治のことは見抜いていたのかも知れない。そのお金は現在も智子の小さな支えとなっている。その母も数年前他界した。

家庭菜園の話以来、英治との会話も少なくなり、智子は花の手入れを放棄した。間もなく畑になるのに手入れはしない。花には可哀相だが仕方がない。

冷静に考えればもともと花壇作りなど無駄な努力だったと思う。家が出来たといっても夫の父親が未だにその権利について、どんな訳か智子には一言も言っていない。英治さえ実権はないのだ。

「親父は俺のために建ててくれたんだ。だから俺の物になるのだ」

英治は思い込み、納得していた。

英治の父親は家が完成した最初の頃、いろいろな人達を連れて来た。古い友人だという弁護士や、病弱であまり外出はしない英治の母親、親戚などである。その都度、智子は一人で大変な思いをさせられていた。

そのことにかかる経費はっさい智子まかせで、何の援助もなかったのである。堪忍袋の緒が切れ、どうにでもなれと父親と英治に、

「いい加減にして下さい。何だと思っているのですか」

声を張り上げていた。

それからは父親だけが来て泊まった。

本当に用事があるのか、その後も父親宗介はやって来た。

その度智子は早々に支度をし、

「留守にしますので、よろしく願います」と言い外で時間を潰すため外出したり、無理に残業したりした。

ある夜のことであった。

二階には息子貴彦の住んでいた部屋と一間と納戸がある。

智子は貴彦の部屋には鍵が掛かるので使っていた。英治とも一線を引いていたからである。ひと眠りした頃、ドアをひそかに叩く音で目が覚めた。英治が忍んできたかと身構え開けると、なんと英治の父親がドアの前に立ち、

「少し話がある」

と言って中に割って入ろうとした。

「一体何ですか。こんな真夜中に非常識な、出て下さい」

「あんたは、私に恥をかかせるつもりか」

「ご自分が何をしているのか、お分かりにならないのですか情けない」

吐き捨てるように言い、とにかく出て下さい、と智子は強い力で押し、素早くドアを閉めた。老境に入った体は苦もなく後にとんでいた。

翌日、早くに智子は出勤してしまった。

さすがに父親宗介は帰っていたが、その後も平気な顔でやって来るのだった。

智子は階下の英治の隣の部屋に移った。隣の部屋に息子がいるのである、いくら何でも愚かなことはできない筈だ。英治は何も聞かず、智子も何も話さなかった。

英治は息子貴彦が生まれた後、どういう訳か男性としての機能に障害をおこし始めていた。余りの気性の激しさが脳に影響を及ぼしているのかとさえ、智子には映っていた。

常軌を逸したこの父子に、智子は疲弊しはじめていた。

そんな智子の態度に、英治は依怙地だと言い、

「お前というやつは本当に嫌な人間だな。花なんかはどうでもいいが土が固くなってしまおう。俺を困らせるためなのか」

（あなたみたいな人に嫌な奴、とは言われたくないわ）智子は可笑しくて黙っていた。すると英治は、

「予定を早めて今度の日曜から始めるから、花は全部抜いておけ。きれいにして返してくれ」

（土台を作ったのは私よ）と、叫びたかった。

翌日、智子は早退した。そして英治の帰って来る前に花を全部抜いてしまった。智子の頬を涙が流れ、土に落ちた。

口惜しかった。しかし英治の切り札の言葉はいつも絶対だった。逆らいようがないのだった。

帰宅した英治は瞬間驚いたようだったが、何も言わなかった。自分の思い通りになった満足げな、傲慢なその横顔を西日が赤く照らしていた。

それからしばらく過ぎたある日。

智子は衣類をクリーニングに出すためより分けていたが、手に何かが触れた。出してみるとあの宝くじだった。

「忘れていた。こんなの当る訳ないわよネ」

独り言をいい、それでも財布に丁寧に挟みこんでいた。

そして金曜日。英治が畑をいじる憂鬱な日曜日も近い。気持ちを振り払うようにして買物…と、フト宝くじを思い出し、銀行の前にある宝くじ売り場の、小さな窓口で例の宝くじを、智子は気のなさそうな感じで差し出した。中の女性も事務的に機械にかけた。智子はその動作をボンヤリとながめていた。……すると、その女性の顔つきが変わった。

「奥さん、これを持って後ろの銀行の三階に行ってください。今私が書いたこの用紙と、この宝くじを落とさない様にしっかり持っていくんですよ。しっかり持って」

智子は女性のただならない様子に、訳がわからないまま、急いで言われるままに銀行に入り、思わず階段を三階まで駆け上ってしまった。目の前のドアを開けた。

正面の大きな時計が目に入った。三時五分前だった。

その部屋には五、六人がいた。

「何かご用ですか」

智子はくじ売り場の女性から渡されたものを差し出して、

「ここに行くように言われてきました」

近くにいた男性行員が、めんどくさそうに寄ってきて、智子から紙を受け取り見た途端、上司とおぼしき席にいる人に駆け寄り、二人でしきりにこっちを見て話している。

智子はいわれるまま飛んできたのだが、その間一息つきながら、何か悪いことしたのかしら、と怯えた。

「あの一」

と、言いかけた時、上司の方がおよぐように智子の前に来て、両手を広げ、

「どうぞ中にお入りになって下さい。さあどうぞ」

通されたのは奥まった所にある、小型のテーブルとソファだけの殺風景な部屋だった。

「奥様、おめでとうございます。お持ちになった宝くじが、見事当たったのでございますよ」

智子は何を言われているのかわからない。女性がお茶を置いたのさえ、ポーっと見ていた。

「奥様、宝くじが当たったのですよ。分かりますか」

部屋にはいつのまにか、三人もの男性が入っていた。

「本当なのですか。間違いだったなんてことにならないのかしら」

そのころになってやっと気持ちが落ち着き、経理で鍛えた頭がまわりだしてきた。

「本当ですとも、しかし、失礼だとは思いますが、こちらとしましてもあのくじをお預かりして、あらためて調べさせて頂かなくてはなりません。いえ、別にお疑いしている、ということではなく一応規則になっておりますので、ご了承ねがいます」

その後、住所や名前はもちろん夫のことなど身元調べのようなことを受けたり、宝くじの説明を聞かされたり、一カ月ほどしてから連絡するといわれやっとその場を開放されたのは、2時間近くかかってからであった。

智子は言った。

「家には連絡しないで、勤務先をお願いします」

我に返ってきつく言い置いたのである。驚きと興奮状態のなかで、そのことは銀行の方でも心得ていた。

智子には実に、一億円が当たったのである。

銀行から宝くじが当たった人に渡される、今後のお金の使い方などが書かれた少冊子や、一番大事な当たりくじの預かり書、早速、我が銀行に入金をお願いのパンフレットなどを抱えて、智子は買物も忘れ、ボンヤリと商店街を歩いていたが、ふっと頭をかすめた思いに智子は慄然とした。

それは……すっかり忘れていたが、落ちていたとはいえ

もともとあの宝くじは英治が買ったものである。何かのはずみで英治の手から滑り落ちたのを、拾ったものなのである。だが少しでもこの事実を英治が知ったらどんなことになるか。恐怖に近い騒ぎになるだろう。考えてみれば事は英治だけの問題ではすまなくなる。当然宗介も介入してくるだろう。絶対に隠し通さねばならない。

どうやって家に辿りついたのか。玄関をはいるといきなり物がとんできた。

「飯の支度もしてないでどこへ行っていたんだ」

大声で怒鳴りながら英治が出てきた。

その時になって智子は我にかえり、黙って台所に立った。何も言わない智子に英治は罵声を浴びせた。何を言われても今の智子は数時間前の智子とは違ったのだ。だが、あれが確実になるまでは現実の安心は得たことにはならないのだ。現実を把握するまでは……。

「ごめんなさい」

小さな声で言った。

巨大な塊が目の前に迫っている。

無意識に回した水道の栓から、水が勢いよく飛び出した。

それからの智子は、現実と夢の世界に悩まされたが、幻想ではない事実徐々に自信を持ちはじめ、ひとつの結論を出していた。

勤務先の顧問弁護士に、それとなく法的処理を聞き出し、智子に権利のあることを調べ上げていた。

あの宝くじは、私が買ったものなのだ。窓口へ行ったのは私だ。どう隠しても、いずれは知れるものである。その時にうろたえることなく、自分を確立しておかねば……。

日曜日がくると、英治は勝ち誇ったように、早速土いじりをはじめた。気持ちだけが先走っているのか、花作りとはいえ、智子のように繊細な土さばきもできず、不器用な手さばきで、足に鍬の先をあててしまった。

早速、大騒ぎになり流れだす血を見て逆上した。

そんな英治を冷静に見つめた。今の智子は頭と体は一体でも、二つが別々に動いているような気がしている。やっとけだるそうに手をかしながら、頭の方は今まで考えたこともないようなことを模索しはじめていた。

夫の英治へのうとましが、頂点に達したことである。

心の深いところで長いこと繁殖していた菌のようなものであり、それが熟成し、今、外にあふれ出ようしているのだ。その菌をどうやったらうまく抹消することできるのか、それで智子の神経は異常な働きをしているのである。仕事の面はおろそかにできない。帰宅すると頭のスイッチを入れ替える。幸い英治とは殆ど会話がないのが救いであった。

その後も日曜日がくると、英治はケガで懲りたはずなのに、長靴も履かず畑作りに精を出していた。さすがに智子にいくらか引け目があるのか、合間の肥料の買い出しなどは自分一人でやっていた。そして、智子が嫌がったにもかかわらず、材木を買い集め小屋を作り、どこで買ったのか、ヒヨコを五羽飼いはじめた。雛の成長は早かった。三、四日もするとその姿は変わりをはじめ、早速鳴き声もうるさくなり、日中の餌やりのことでもめることになった。当然おきる問題なのであった。智子は自分でも驚いたくらいはっきりと断ったのである。二人が外に出ている現在を考えれば、生き物の世話は無理なのであって、計画なしに勝手に事をすすめたのだから、英治自身がやるべきである。

いつにない智子の態度に、英治は苦々しく智子を睨み、次につけ加えた言葉は

「これからは昼休みに餌をやるため、家に帰って来なければならない。車のガソリン代が掛かるから、家計費の方から出せよ」

と言い、すべてお金が絡むのだった。

智子はそれでもいいと思ったが、考えてみると英治に家に度々帰ってこられて、あちこちかき回されたり、銀行などからのメールや、もしも電話などがあつたりしたら大変だ。少し考えるふりをしてから智子は言った。

「それは困るわ。じゃー、二人で当番制にしましょう」

穏やかさを装い、静かに申し出た。

「最初からそう言えばいいんだ」

そろそろ小屋から嫌なおいがたちはじめていた。

そして……、三週間ほどしたある日。

智子の勤務先に銀行からついに連絡が入った。昼食から戻り席に付いた時目の前の電話が鳴った。受話器をとった智子の耳に、例の銀行の担当者から

「長いことお待たせいたしました。お預かりした宝くじは確かな一枚でございました。お手続きが済みましたのでご来店頂きたいのですが。よろしければお車でお迎えにお伺いいたしますが」馬鹿丁寧な言い方で電話は切れた。

「迎えなど困ります。私の方から出向きます」

そんな申し出を受けることなどできやしない、と苦笑した。

智子はその日は銀行には行かなかった。早速、と思われるのも嫌だったのと、心の準備が出来ていなかったからであった。いよいよだ……。全身が硬直しそうだった。

翌日、智子は休みを取り午前中銀行へ出かけた。前と違う応接室に通された。これも前と違うあきらかに上層部に席を置くような貫禄のある男が、名刺を出しながら

「この度はおめでとうございます。これはそのままの金額を、とりあえず当方の口座に入金させていただきました通帳でございます。なにしろ現金でお持ち頂くわけにはまいりませんので、お改め下さい」

名刺を見ると、名前の上に副頭取の三文字が付いていた。

智子はテーブルの上に置かれた通帳を手にして確認した。

真新しいページに間違いなく、九桁の数字がならんでいた。

「ありがとうございます。お手数でした。確かに頂きました。お世話さまでした」

腰を浮かせ智子は礼を繰り返した。そのころになるとコーヒーやケーキなどが出て、男性の行員などが三人ばかり来た、智子を囲んだ。副頭取は黙って智子を見ていた。

「失礼ですが、このお金のご予定はございますか。できましたら当方の銀行におまかせ願いと存じますが、如何でしょうか」

口ぐちに何かと勧めた。しばらく智子は黙って聞いていたが、話が途切れた時にサッと言った。

「まだ何も考えが浮かびません、しばらく静かに考えようと思います。その時はよろしくお願い致します」

「すぐにはやはりご無理ですよ」と残念そうな空気が漂った。智子は立ち上がり帰りかけてから

「くれぐれも家の方には来ないで下さい。何かのときにはこちらから連絡いたしますから」

大きな紙袋に入ったものを渡され、上気したその場の風を立ち切るように、逃げるようにその部屋を飛び出した。とにかく一人になりたかった。だがこのやっかいな大きな紙袋を先になんとかしなくてはならない。知り合いに合うのを避け、とりあえず家に駆け込んだ。

智子は部屋の中に入ると、へたり込むようにその場に座り込み、しばらくの間目を閉じ興奮す

る頭を鎮めた。

落ち着かなければ、と思い平静を装ったが、心の底では大波のようなものが絶えずざわついていた。

英治は智子の近頃の態度を、まだ畑のことだと思っているらしい。今の智子は畑などとっくに忘れている。もはやそんなものはどうでもいいのだ。英治には当分そう思わせておこう。そのほうがかえって都合がいい。

それからの智子はやりくりをつけては仕事を休み、銀行にお金を振り分けた。貸し金庫などの手続きを済ませる頃には、緊張にも軽い陶酔さえ感じ出していた。

その頃、英治の体に、まったく予想もしていなかったことが起こりはじめていたのである。

畑作りの際、土の感触を楽しむと言って長靴をぬぎ素足にもどっていた。前に鍬で怪我したところが治りきっていないのに、再び鍬をあてたのである。

「このくらいの傷で、医者などにいけるか」

自分でいい加減な手当てをしていた。鶏の糞がかなり出るようになり、畑に入れ土と混ぜたりしていた。

右足の親指のあたりが異常な赤みで腫れてきていた。英治が薬をつけている時、何気なく見た智子は

「悪くならないうち病院に行ったら」と言ってみた。

「お前の指図は受けないよ。それより何か傷薬でも探せ」

「傷につける薬なんて何もないわ」

「ふつう薬箱にはひと通り入れておくのが当たり前だろ。薬一つ満足に揃えられないんだから」

その時フト智子は思い出したことがあった。

「前に使った時、よく効いた薬がまだ少し残っているかも知れないわ」

急いで自分の部屋に取って返し、使いかけの小さなチューブに入った薬を手にして戻ってきた。

「少量をよくすり込むようにと書いてあるわ」

英治はその薬を、智子の手からひったくるようにして取り、早速傷に塗っていた。

その薬は、かなり以前智子が包丁で深く指を切り、大怪我した時、医者がくれたものだったが完治したあと忘れていたのだ。薬を渡しながらその医者が言った。

「強い成分が混じっているから、長く続けないように。三回もつければ充分だから」

医者の言ったように、数回で本当に傷口がふさがってきれいになった。

その薬を何故英治に渡したのか。チューブの後ろの注意書きの箇所に、有効年月日が過ぎた場合は使用しないように、と、赤い傍線が引いてあった。

薬はとっくに使用期限は切れていた。

期限の切れた薬は役に立たないか、反対に思いがけない別の、何らかの威力を発揮するのか智子には分からない。

それ以後智子は何も言わなかった。

それからしばらくして、智子が帰宅すると英治が部屋で寝ていた。めずらしいことだ。

「飯はいらない」と言った。これもめずらしいことだった。何か声をかけようとしても、どうせ素直に受けないのだから、智子はほっておいた。

翌日、顔が少し蒼かったが、英治は自分でお茶を入れ一口飲んだだけで出勤して行った。

その英治の背中に浴びせるように

「鶏の餌の当番今日はあなたよ」

平然と智子は言った。英治はすごい勢いでドアを閉めた。

智子は最近自分が嫌な女になったような気がしている。

長年の英治との暮らしのなかで、蓄積されたものなのか、嫌な女の要素は初めから存在していたのか、英治と知り合った時から、自分がこうなるような予感があった。短い交際中もかすかな危惧を感じていたのに、実家から離れたいという一念で、自分で適当に妥協してしまった。智子にも多少英治と類似している線の結び目がなかったとはいえない。それに背中を押されてしまったのか。愛ではないちょっとしたただの誤算だったのか。

そして今、智子の状況は大幅に変化しつつあるのだ。嫌な女を演じ続ければいい。次第に陰険になりつつある英治との間を、覚めた目で見られる余裕は、やはり、大きなお金の加護が存在しはじめたからだろうか。愛情を持ってそうもないこの家との別れも近い予感がする。少しずつ何かが動きそうだ。

(私達がここまでこられたのが、不思議なのよ)

智子のよく呟く言葉である。

長年の陰鬱な生活から逃避できるのだ。

早く清涼な空気を吸いたい。静かに考えていた。

二日ほど後のことである。仕事から帰るとまた英治がベッドで寝ていた。

「どうかなさったんですか」

返事がなかったが、かすかに動く気配がしたので、智子は台所に入って夕食の準備をはじめた。

しばらくたった時、ドスンと異常な音がした。そこで智子が見たのは、英治がベッドから転がり落ち、起き上がることができずもがいている姿だった。英治のそんなぶざまな格好を見るのは勿論はじめてである。いつも誇り高く、智子の前で偉そうにしていた英治の、最低な姿態であった。

「どうしたんですか。一体何なの」

「余計なことを言っていないで、早くタクシーを呼べ」

父親宗助はよくタクシーをつかっていた。

救急車、と言わずタクシーといったのは宗助のことと、英治自身の頭がすでに混濁しかかっているようだ。

駅前のタクシー会社に電話をしてから、しかし、英治の元には戻らずとなりの部屋に行き、英治の薬箱の中から、例のチューブ入りの残りの薬を、素早く取り出し自分の部屋に戻った。どうしてそうしたのかわからないが、説明書にはステロイド系と、もう一種類強い成分が微量が入っているのだと読んだような気がしたからである。確かめようと見たが、英治の指に付いていた土が文字を消していた。

「薬というのは、諸刃の剣でもあるわけで、毒も時には立派な妙薬になるのだよ。そんなことまであんたが知る必要はないけどね」

医者がそう言いながら智子に渡してくれた薬である。

その医者腕は確かだったが、変わった人物だった。その薬が英治の傷にどう作用したのかわからないが、とにかく自分の手に戻したのである。

しばらくすると黒塗りの車体が、玄関先に到着した。

英治に車の来たことを知らせに行くと、上を向き手足をのばしたまま大の字になり動かない。さっき見た時は体を後ろに反らしていたのに、どういうことなのか。仕方なくタクシーの運転手を呼んだ。智子も手伝って車に乗せたが、「奥さんも一緒について行って下さいよ」と言われ、初めての病院への付き添いとなった。英治の体は熱のせいかわらなかつた。

救急扱いで診てくれた医師の顔に緊張が走った。

「すぐ入院の準備をします」

処置室の中はあわただしくなつた。

そして……二日後、英治はあつてなく死んでしまった。

破傷風の菌が鍬をあてた傷口から全身に及んだのである。

破傷風菌は土や動物の糞便中であつて、傷口が泥などで汚れていると増殖しやすい。英治は鶏の糞や、同系統の肥料を土にやたら混ぜていた。せっかちな英治が作物の成果を急ぎ過ぎたのである。花の気持ちになつて栽培し、生き生きとした花を咲かせていた智子に対抗し、早く立派な野菜類を作り、父親達に自慢をしようとして、気ぜわしく焦つた挙げ句の結果だつた。

その過程は、智子にしか理解できない心理なのである。

破傷風の菌の潜伏期間は一ヶ月位らしいが、脳から遠い下肢の傷の場合は、毒素が中枢神経に達するのに時間がかかるため期間が長くなるという。

英治があつた頃、食事をいらなつたと言つたのは、あつたの筋肉がかたくなり、口が開けられなくなり物が食べられなくなつたのだ。化膿菌が血管の中に流れ込み、敗血症との合併を起こし、ベッドから落ちていた時、体をのけぞらすようにしてつたのも、症状の一つだつたらしい。

自分でいい加減にいろいろな薬を塗りたくり、智子がきちんとした治療を勧めても、耳を貸すことはなかつた。

病院の、担当した医者が、

「どうしてもっと早く治療を受けなかつたのですか。破傷風菌も早くに治療すれば、治るのですよ」

(治療代が惜しくて、自分で治療をしたのです)とは言いたくなかつたが、咎めるような言い方をされた智子ははっきりと、英治の態度からきていることを話した

「わかりました。どんな薬をつけてつたのですか」

医者から言われたとき、智子は簡単な、どこにでもあつた薬の名前を言つた。

もう薬の問題ではないのだと智子は思つた。いつもの癖で甘く考え、自信過剰が命取りになつてしまった。

まったく運がなかつたとしか言いようがない。

変に信じてつた、あつたの仏像の庇護さえなかつたのだ。

加えて、肝心のところでお金の使い道を誤り、自分の内なる敵、細菌などに負けてつたのである。英治にとっては全く不測の事態とも言うべき災難だつたろう。

畑に命を賭けてしまったような英治の性格の歪みに、一種の狂気を感じ、呆れながら、同時に命の儚さを思い心のうちで合掌したが、涙は出なかった。

まだ現役だったのに英治の葬儀への弔問客は少なかった。年度替わり、という役所の時期もあったが、通夜の客十数人ほどと、翌日の葬儀は課から代表が五・六人来ただけであった。

葬儀場ではなく、家での密葬という形と、死亡の原因も稀なものだったので周りの人にも戸惑いを与えていた。だが、智子は英治の、簡単に言えば普段からの付き合いの悪さが、こんな時にもこのようなかたちで現れる世間の風評を、悲しく受け止め、英治の心の闇の救いがたさを思った。

英治の身内はどう感じたのだろう。

親族一同は森閑として、誰も言葉を発しなかった。

「親父は普段から付き合いが悪かったからな」

息子の貴彦が大きな声で言い、智子の顔を見た。

二人の立っている間を風が小さく渦をまいて通りすぎた。

野辺の送りも済ませた後、出席していた英治の父親宗介が、智子にちょっと目を這わせ、「承知してもらいたいことがあるのだが」と切り出した。父親はどうゆう訳か、この葬儀に例の友人だという弁護士を同道してきていた。英治の兄など身内が早々に引き揚げていたのを、智子は不審に思っていた。

父親の話しは智子にとって想像もしていないような内容だった。

「この家を出てもらいたい。ここにいる友人の弁護士の事務所を開き、私も東京に住もうと思う。最もあんたが私の世話でもしてくれるなら、引きつづきここにいてももらっても一向に構わない。その方が私としては有り難いが」

そばからその弁護士がもっともらしく口を添えた。

「あなたもこれから一人でやっていくのも大変でしょう。私を手伝ってもらうのもいいし、考えてみたら如何ですか」

智子は五十歳だが、子供は一人しか生んでいないせいか、今でも充分にきれいであった。

それもそのはずで智子の母親は昔、下町小町と評判だった人である。その智子を英治は未練の目で熱っぽく見る時があった。しかし、それは自分の所持品として見る目で、心では智子の清楚な身じまいと若さに嫉妬しているだけの、成長できない男だったのである。

智子は余りにバカにした話に腹が立ち、黙っていた。

「英治に義理立てする必要はないよ。あいつは、男として役に立っていなかったようだからね。私はまだ健康だし」

あの夜、智子の部屋へ押しかけてきたのは、すべて承知の上だったのだ。

なんと言う父子なのだろう。

二週間ほど前、英治は相模湖の実家に行ったそうである。そういえばその頃、朝早く家を出て、日付が変わったころ帰宅したことがあった。そんなことさえ智子には何も言わなかった。

あの時がそのことだったのか、と今更ながら英治のおぞましい背信に、背筋が冷たくなっていた。

英治はこう言ったそうである。

「もし俺に何かあった時は、智子を離婚ということにしてくれ。あの家に置かなくてもいいが、あとは親父の好きにすればいい」

英治がそんなことを言いに行った真意は何なのだろう。すると英治は自分の体の変調を悟っていたのだろうか。

英治は智子の例の変異は知ってはいなかった。智子の困窮をひたすら思い浮かべての陰險な計画だったのだろうが、すでに英治の知らないところで、天地ほど事情は変わっていたのである。

何故そこまで憎悪をもつのだろう。

智子は思い出していた。英治は負けず嫌いの感情が強く、智子に対してさえ信じられないような競争意識を持っていた。勝ち負けは命まで計った。

昔、智子の友人が保険会社に就職したので、お祝いに英治の保険に加入しようとした。その頃保険は人生の安全な保証的財産になっていた。結婚して間もなくであり、何かの時に、と思っただけであったがその話をした途端、英治は信じられないような言葉を吐いた。

「勝手に俺の体に保険など掛けやがって」

血相を変えて怒鳴った。

この時の英治の態度に、智子は漠然と将来に不安を抱いた最初だったのである。

以後その友人とは疎遠になって久しい。それだけで済まず、いつの間にか、今度は智子の生命保険をつくっていた。それ知り智子が抗議すると、

「職場での義理だったんだよ」と、白々しく言った。

勝気な性癖は抑制が効くはずもなく今日に至った。

自分がまさか破傷風菌に犯されているとも知らず、手当てをすれば治る病とも知らず、浅はかな行動と言動に、智子はあきれ他はない極致にいた。

智子は「この家を買って取ってもいいですよ」と言ってやりたかったが、こんな家は欲しくもないし未練もない。

「バカな話しは、お断りさせていただきます」

「そうか、好きにすればいい。後になって言ってきても遅いからね。英治の方から金が下りるだろうから、それはそっちで手続きすればいい。なるべく早く籍を抜くように」

かなり勝手な言い分である。

「すぐに片づけられる問題ではないのでしばらく時間はいただきます」

「ま、あなたのお手並み拝見としよう」

「一つだけ聞かせて下さい。どうして家が建って十年もたつのに、私達に権利書を渡さなかったのですか」

「そのことか。最初は渡す積もりだった。私は息子英治にこの家はやろうと考えていたからな。しかし途中で気が変わった。英治は中学生の頃、裏山で友達と遊んでいて、大きな石に頭をぶつ

け大怪我をした。私が夢中で医者を探し助かったのだ。そのことを英治は私にずっと感謝していたようだ。だがその時脳の中に後遺症が残ったらしい。

男としての機能がなくなったのも、恐らくそのせいだろう。もともと短気な方だったが、後遺症の惑乱も作用しはじめてきたらしい。だから英治にこの家を任せることはやめたのさ。あんたに譲る、と言うわけにもいかないし、それで家の管理だけ任せたわけだよ」

智子にとって初めて聞く話であった。

「そんな話は初めて聞きますが、私の見るところ怪我の後遺症が原因とは思えません。もともとあった病気だったんじゃないですか。貴彦のことを考えると、もっと早くに知るべきでした。取り返しのつかない無念さです。もうなんの未練も、もちあわせてはおりません」

「あんたは何てことを言うんだ」

智子は遠慮せず今までの鬱憤をはらすかの様に言った。

何か宗介がわめいていたが、智子は聞いていなかった。

すこし焦らして、相手の様子をみたい思いにかられていた。一方的に引導を渡されたようで、許せなかった。

自分には巨大で強力な大金が味方している。でも貰うものはいただく。それからゆっくり退去しよう。

それにしても英治父子のやり方は無礼だ。英治と結婚以来、特に父親宗介との間に横たわっていた霧のような正体が、やっと表面に現れてきた感じだった。田舎の旧家で体面を重んじながら一方で、父親宗介は、息子の嫁を女として扱おうとさえしたのである。息子が嫁より先に死んでしまった現実腹を立て、艶事をくつがえされ、自分こそ低俗な錯乱状態に陥っているのだろう。

「あんたは英治に扱いにくい、と音をあげさせたほど芯の強い女だ。そのうち連絡するが約束は守ってもらいたい」

この親子の女性を見る目は似ているらしい。

間もなくすべては終わる。かすかな胸の鼓動を聞いた。

それにしてもどうしてこんな大金が授かったのか、その不思議を何度も考えていた。恐ろしい気さえする。

あの時、あの宝くじを捨てていたら今の私は無かった。

まさに紙一重、の幸運というべきかもしれない。

宝くじに執念を燃やし続けた英治の気迫は、一番認めたくない相手智子に、結局財を与える結果になってしまった。

あの立像のご利益だとは思えないし思いたくない。目に見えない屈折した神の領域に智子が紛れ込み、そして祝福を受ける結果になったのかも知れないし、あるいは単なる偶然なのかも……

縁側に座り何度も反復していた。

小屋では鶏が相変わらずせせこましく動き回っていた。

「鶏はそのまま置いておくように」

と、父親の宗介が言っていた。英治の形見とでも考えているのだろう。

何気なく小屋を見ていると、囲っている材木の一本に、白い小さな虫が五・六匹徘徊している。そこは日陰になっている薄暗い箇所、木が重なり合い湿りけがあった。

何の虫だろう。

近寄って目を凝らしよく見ると、何とシロアリであった。

シロアリ……が、どこから……と不思議なものを見たようになおも見ていたが、ふと思いでいた。英治が小屋を作り始めてしばらく後、相模湖へ行ったことがあり帰ってきた翌日、車のトランクの中から、薄汚い材木をひと抱え運び出すのを智子は見ている。あの時持ってきた物に違いない。

その時、智子の脳裏を閃光がはしった。

(これはそっくり使用させていただきます)

智子は急いで家の中に入ると、英治の使っていた道具箱を開き先の尖った工具を持ち、ある場所を探し始めた。

英治は若いころ一時期、建築に興味を持ったことがあり、「今度のこの家の建築に役にたったよ」

と、父親と自慢気に話していたことがあった。別に詳しく聞いていた訳ではない。

「湿気に気をつけねば……」とか言っていたように思う。

(もしかすると、シロアリのことだったかも知れない)

家の中でシロアリが特に好む場所は台所や、洗面所、風呂場などの水まわりだと、なにかの本で見たことがある。水まわりだけに限らず、畳でも、原料が木である本など、要するに一度住み着いたら最後、ほって置いたらほとんどの物に被害が及ぶのだ。体は小さいが恐ろしい生き物だと書いてあったように記憶している

今、智子はその湿気を探しながら、英治の言っていたことを思い出したのだった。

(十年たっているのだ。湿気がないわけではない)

ふと、智子は玄関先の下草におおわれた所の土台の横木のあたりを見てみた、思った通り湿気はあった。盲点はあるものだ。台所や風呂場の水分がいつのまにか、這ってきていたらしい。英治と父親宗介の自慢も崩れたわけで、よく見ると何カ所か見つけることができた。それぞれの辺に小さく、しかし深く錐で穴を開けた。おもいの他その部分の材木はもろくなっていた。

(さて……と、最後の仕上げをしなくちゃ)

再び台所に行き、小さな空きビンを持つとシロアリのところへ戻った。驚いたことにさっきより数が多くなっていたのである。

割り箸でビンの中に夢中で二十匹ほど入れると、急いでフタを閉めた。ビンの中でシロアリは互いの頭をぶつけ合い、

頑丈そうな歯を上向けて、噛む対象をしきりに探した。目がみえないのでビンの中で右往左往する様は、気分が悪くなるほどだった。

とにかくあそこに入れてしまわねば……。

三・四匹くらいつつ、柱の穴に送り込んだ。本能的に暗い所を察知するのか、さっさと穴にもぐりこんでいった。こんなにうまくいくとは思っていなかったし、罪悪感もなかった。あとは小

さいが破壊的能力を持つ虫に任せよう。

念のため穴には土をこすりつけておいた。完成を確かめるように手でその上に触れた。

そして最後にそのいくつかの穴を改めて見届けた。どの跡にもすでにシロアリの姿はなかった
もう思い残すことはない。

智子は秘事をやり遂げた後の軽い疲労感と、満足感に

小さく肩を揺すった。

英治の作りかけの畑には、晩秋の日差しが一面に覆い、片隅には野菜の群れが、英治の意地
のように育っていた。